

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K13270

研究課題名（和文）関係継続の期待が行動理解に及ぼす影響：社会生態学的アプローチを用いた検討

研究課題名（英文）Effects of relationship continuity expectations on behavioral understanding: a social-ecological approach

研究代表者

小宮 あすか (Komiya, Asuka)

広島大学・人間社会科学研究科（総）・准教授

研究者番号：50745982

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、関係が長く続くことの期待が他者の行動の理解の仕方にどのような影響を与えるかを探った。本研究で明らかとなったのは、「『人間関係が長く続く』と期待する人たちはそうでない人たちよりも他者の反社会的行動に注意を向け、積極的に情報を処理する」ということである。このような注意傾向は他者の行動の理解の仕方と関連することが議論されており、特に「その人が悪いことをしたのは、状況や環境のせいだ」と外的要因に帰属する日本人の心的傾向を説明できる可能性がある。本研究は、「人間関係が長く続く」という日本の社会環境の特徴が、人々の他者の行動理解の仕方に影響しうることを示した点で重要な研究である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「人がどのように他者の行動を理解するか」という研究関心は、心理学においては古典的なテーマであると同時に、裁判場面（その人は意図的に規範を破る行為を行ったか、それとも状況によるやむを得ない過失か？）や交渉・対人場面（その人は信頼できる良い人だからその行為をしたのか、それとも駆け引きのひとつか？）などの応用的関心へとつながる重要なテーマでもある。本研究は、そのテーマからさらに踏み込み、「なぜ人々が他者の行動をそのように理解するのか」という疑問に対して取り組み、その回答の1つとして社会環境の影響を実証的に示した点で意義ある研究である。

研究成果の概要（英文）：The present study explored how the expectation of long-lasting relationships affects the way people understand the behavior of others. The findings of this study revealed that people who expect long-lasting relationships pay more attention to the anti-social behavior of others and process information more actively than those who do not. Because such a tendency is considered to be related to the way we understand the behavior of others, it may explain the Japanese tendency to attribute behaviors to external factors, like "the person did the wrong thing because of the situation or environment." This study is important in that it shows that the characteristic of the Japanese social environment such as long-lasting relationships can influence the way people understand the behavior of others.

研究分野：社会心理学

キーワード：住居流動性 関係流動性 帰属 対応バイアス

### 1. 研究開始当初の背景

今までの研究は、人は他者の行為の理由を予測するとき、その人の置かれた状況や文脈の影響(外的要因)を軽視し、性格や態度などその人の持つ一貫した性質(内的要因)に帰属する傾向があることを繰り返し示してきた(対応バイアス; e.g., Jones & Harris, 1967)。一方で、このバイアスには文化による影響が見られ、個人主義文化である欧米圏では、集団主義文化であるアジア圏よりも対応バイアスが強く見られる可能性が指摘されている(e.g., Miller, 1984; Kitayama et al., 2006)。この理由として、多くの研究では文化心理学的アプローチをとり、その文化で優勢な人間観による説明を行ってきた。すなわち、集団主義文化では「人間は社会関係・集団に埋め込まれた存在である」という人間観が優勢であるために、人はその人の置かれた社会的状況を重視して人の行動を理解しようとしている、という説明である。しかしこれらの文化的人間観による説明は、心的現象を説明するために作られたモデルから心的現象の説明を試みようとするものであり、トートロジーの危険をはらむ(亀田・村田, 2000)。

この問題に対し、本研究では、「心は社会的環境への適応として形成される」とする社会生態学的アプローチ(Oishi, 2014)の立場からの解決を試みた。具体的には、本研究は、社会でデフォルトとなっている関係の長さという社会生態学的要因に着目し、行動理解の文化差を説明することを目的とした。

より具体的には、日本のように関係が長く続くことが期待される社会では、人との付き合いは同じ相手とゲームを繰り返す、繰り返しのあるゲームとなりがちである。このような社会では相手の行動に応じて応報的に振る舞うことが適応的であり(e.g., Axelrod, 1984)人の行動はその人の置かれた状況や文脈に大きく依存すると考えられる。このため長い関係がデフォルトの社会にいる人々は、状況や文脈に注意を向け、人の行動を理解し、その情報から行動を予測しようとするかもしれない。一方で、アメリカのように短い関係がデフォルトである社会環境で生まれ育った人たちは、付き合いがすぐ終わりとなる可能性が高いため、インタラクションを1回1回別のもの、つまり繰り返しのないゲームとして捉える可能性がある。このような場合には、人は相手の行動に依存せず自由に振る舞うことが可能である。このため、関係が短い社会にいる人々は、社会状況や文脈ではなく、状況に依存しない相手自身の意図や性格などに注意を向け、人の行動を理解しようとするかもしれない。集団内で関係が固定化されているような社会的環境では集団主義的文化が育つ(Oishi et al., 2007)ことを踏まえると、このような関係の長さの違いが対応バイアスの社会差を生み出す要因となっている可能性が指摘できる。

これまでの研究で、日本はアメリカよりも引越し率が低く、離婚率や転職率も低いなど、関係が長く続く社会であることが論じられている(e.g., Oishi, 2010; Yuki et al., 2007)。そこで本研究では、日米比較研究を主たる手法として、期待される関係の長さが人の行動理解に及ぼす影響について検討することを目的としていた。

### 2. 研究の目的

本研究では、以下の2点を明らかにすることを目標としていた。

**目的1** 日米における人間関係のゲーム構造(繰り返しのあるゲーム/1shotゲーム)に関する信念と行動理解との関連を、調査・実験によって明らかにする。

**目的2** 将来プレイするゲームを実験的に操作することにより、期待される関係の長さとの行動理解との因果関係を明らかにする。

しかし後述するように、目的1に関連する調査・実験において予測に反する結果が得られたため、目的2と関連する研究は今回実施していない。

### 3. 研究の方法

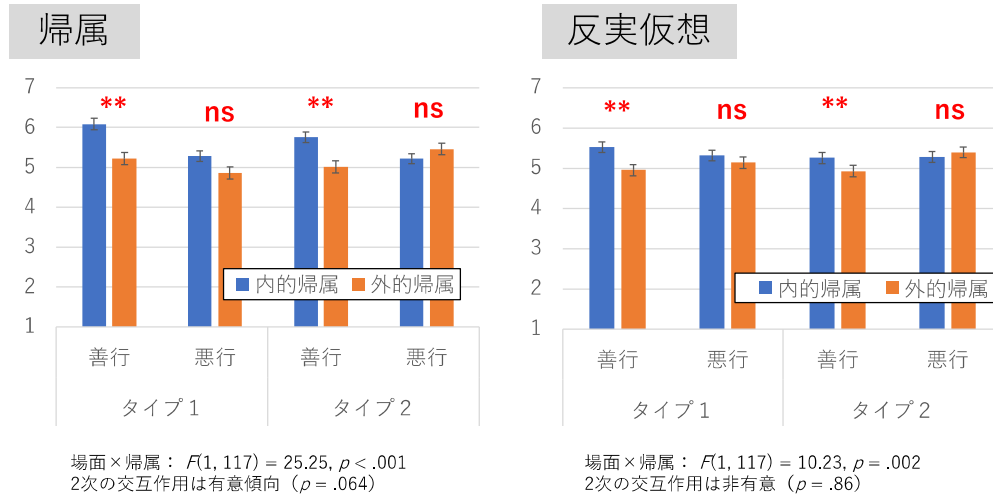
本研究では目的1と関連して、主に以下の調査研究を実施した。

(1)日本人大学生を対象にウェブ調査を実施した。調査参加者は、将来今の関係がどの程度続くと考えているか、どの程度人々が応報的に振る舞っていると思うか(Perugini et al., 2003)人の行動がどの程度外的/内的要因に影響されていると思うか(Kitayama et al., 2006)のそれぞれの測度について回答した。

(2)フォローアップの調査としてウェブ実験を実施し、これまでの引越し経験の多寡(関係の長さの見積もりに影響を与えられられる)によって他者の反社会的行動/向社会的行動の理解の仕方が異なる可能性を検討した。

#### 4. 研究成果

先行研究では、日本人を対象とした場合、内的要因によって行動を説明しようとする対応バイアスが見られないことが報告されていた (Kitayama et al., 2006)。しかし、本研究の結果、他者が反社会的な行動をした際には対応バイアスは観察されなかったものの、社会的な行動をした際には対応バイアスが観察された (図 1; 内的帰属が外的帰属よりも高く評定された際、対応バイアスとして評価する)。この結果は、本研究計画で説明しようとしていた行動理解の文化差がそもそも頑健に見られない可能性を示唆するものであった。



そこで、フォローアップの調査として、他者の反社会的行動と向社会的行動を提示した際に、そもそも注意を向けるかどうか異なる可能性を検討した。日本の一般成人を対象としてウェブ実験を実施した結果、住居流動性が高い人たちは他者の向社会的行動に注意を向け、その人に関連する情報を積極的に処理する傾向にあったのに対し、住居流動性が低い人たちは他者の反社会的行動に目を向け、その人に関連する情報を積極的に処理する傾向にあることが示された (Fang et al., 2022)。

先行研究では、対応バイアスは情報を精緻に処理しないことで生起することを論じている (Gilbert & Malone, 1995)。日本において反社会的行動に対して対応バイアスが見られなかったのは、住居流動性が比較的低い社会である日本では、他者の反社会的行動を目撃した際、その行動要因が注意深く処理されることが原因となっている可能性がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yuchen Fang, Masato Nunoi, and Asuka Komiya	4. 巻 12
2. 論文標題 Relationship Seekers Versus Relationship Selectors: Influence of Residential Mobility on How to Evaluate Others	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 769487
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2021.769487	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yuchen Fang and Asuka Komiya	4. 巻 -
2. 論文標題 Effects of Residential Mobility on Impression Formation Across Different Social Contexts	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Asian Journal of Social Psychology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ajsp.12630	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小宮あすか・方予辰
2. 発表標題 住居流動性が印象形成プロセスに及ぼす影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 方予辰・布井雅人・小宮あすか
2. 発表標題 引越経験が人物評価に及ぼす影響：温かさと有能性に着目して
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------